

平成30年度 全国学力・学習状況調査における

北九州市立 藤木 小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成30年4月17日(火)に、6年生を対象として、「教科(国語, 算数, 理科)に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にしていただきたいと思います。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査内容

- (1) 教科に関する調査(国語, 算数, 理科)

主として「知識」に関する問題(A)	主として「活用」に関する問題(B)
・身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容	・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力
・実生活において不可欠であり、常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能	・様々な課題解決のための構想を立て実践し、評価・改善する力

※理科については、主として「知識」に関する問題と主として「活用」に関する問題を一体的に問う。

- (2) 児童質問紙調査

児童質問紙調査
○学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

3. 教科に関する調査結果の概要

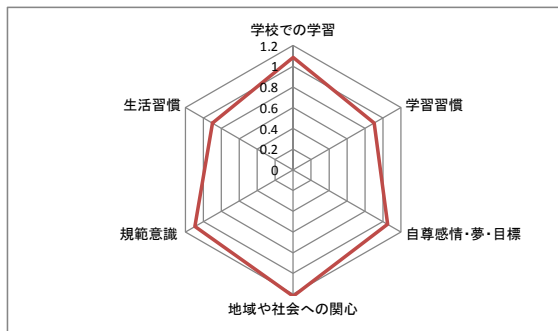
(1) 全国・本市の学力調査(国語A・B, 算数A・B, 理科)の結果

本年度の結果	国語A		国語B		算数A		算数B		理科	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	8.5	71	4.3	54	8.6	61	5.0	50	9.6	60
全国	8.5	71	4.4	55	8.9	64	5.1	52	9.6	60

(2) 本校の学力調査結果の分析

国語A	全体的な傾向や特徴など	・全体的に全国平均正答率を下回っており、基礎的な言語知識の定着を図る必要がある。 ・慣用句や敬語、漢字を正しく使う問題に対する無回答率が全体的に高かった。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	主語と述語の関係などに注意して、文を正しく書く問題は正答率が高い。	
	努力が必要な問題	文章全体の構成の効果を考えて物語文を書く問題は、特に正答率が低かった。	
国語B	全体的な傾向や特徴など	・全体的に全国平均正答率とほぼ同じであった。特に、「話し合い活動」に関する問題の正答率が高かった。 ・目的や意図に応じて、内容の中心を明確にして詳しく書くなど、書くことに課題がある。	全国平均正答率との比較 同程度
	よくできた問題	計画的に話し合うために、司会の役割を捉える問題は正答率が高い。	
	努力が必要な問題	目的に応じ、文章の内容を的確に押さえ、自分の考えを明確にしなが読む問題は正答率が低かった。	
算数A	全体的な傾向や特徴など	・全体的に全国平均正答率を下回っており、基礎的・基本的な知識の定着を図る必要がある。 ・単位量当たりの大きさを求める問題の正答率が全体的に低く、百分率や1に当たる大きさを求める問題が苦手なことがはっきりした。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	180° や360° を基に180° よりも大きい角の大きさを求める問題は正答率が高い。	
	努力が必要な問題	折れ線グラフから変化の特徴を読み取る問題は無回答率が高かった。	
算数B	全体的な傾向や特徴など	・全体的に全国平均正答率を下回っている。しかし、応用問題に対して、苦手意識を持たず、粘り強く取り組む姿勢が見られた。 ・示された考えを解釈し、条件を変更する等して考え、立式したり表に整理したりすることに課題がある。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	図形の構成要素等を基に、集まった角の和が360° になっていることを記述する問題は正答率が高い。	
	努力が必要な問題	棒グラフと帯グラフから読み取ることができることを、適切に判断する問題は正答率が低かった。	
理科	全体的な傾向や特徴など	・全体的に全国平均正答率をやや下回っている。基礎的・基本的な知識の定着を今後も継続して図っていく必要がある。 ・電流の流れ方に関する問題の正答率が全体的に高く、問題解決型の学習の成果が見られた。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	・乾電池のつなぎ方を変えると電流の向きが変わることを実際の回路に適用する問題の正答率が高い。	
	努力が必要な問題	・複数の情報を関係づけながら、分析して考察したり、より妥当な考えに改善したりする問題の正答率が低かった。	

4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要



質問紙調査の結果分析
<ul style="list-style-type: none"> ・「家で宿題をしている」と答えた割合は100%であった。 ・家庭学習時間が1時間以上の児童が4割弱と、全国より下回っている。「家庭学習チャレンジハンドブック」「藤木スタイル」等を活用して、家庭学習の定着を図る必要がある。 ・「人の役に立つ人間になりたい」など、自尊感情・夢・目標に関する割合は全国を上回っている。 ・朝食や就寝時間など、生活習慣に関する割合は全国を下回っている。「早寝・早起き・朝ごはん」「携帯・スマホ電源10時OFF」を家庭・地域と連携して徹底していく必要がある。

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組(全校で・学年で・学級で)

<ul style="list-style-type: none"> ・授業開始5分を利用し、フラッシュカード等を用いて反復練習を行い、既習言語の定着を図る。 ・学力定着サポート週間を実施し、児童のつまずきを分析し、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る。 ・学期に1～2回、各教科で思考力・判断力・表現力等を育成する授業を行い、授業力の向上を図る。
--

② 家庭生活習慣等に関する取組

<ul style="list-style-type: none"> ・フィルターの取付や使用時間など、携帯・スマホの取扱いを家庭できちんと確認し、管理を徹底する。 ・「藤木スタイル」で紹介された学習方法を参考に、家庭学習に取り組んでいく。また、「家庭学習チャレンジ週間」を設定し、家庭学習の習慣化を図る。
